

「子ども」

—— 保育の理念と課題 ——

浅 見 均

本プロジェクトは2009年度より2010年度の2年間にかけて「子ども——保育の理念と課題——」をテーマとし、短大3人の所員と4大1人の客員研究員というプロジェクト構成員によって進められ、終了したので、その研究実績をここに報告する。

本プロジェクトのテーマは次のような背景を持っている。即ち、現代社会において乳幼児は実に様々な環境の下に置かれている。国は認定こども園という、幼稚園と保育所の一体化施設の設置に躍起になっている。男女雇用機会均等法が制定されてより、男女を問わず大人が安心して働ける社会を目指して環境を整備しているのである。この認定こども園の幼保一体化政策は、わが国の子育てを親に代わって行おうとする施策であり、子どもはどう育つべきかという子どもの視点が欠落しているものであるといえよう。本研究プロジェクトは以上のような現状を踏まえつつ、あくまでも子どもに視点を置き、子どもに纏わる幅広い研究領域より講師を招き情報収集を行い、さらに乳幼児の生活する施設に全てのプロジェクト構成員が赴き、視察することを通して、共通の現状認識をし、その上で課題の所在についてそれぞれの研究領域より迫ることを目的とした。以下研究活動を報告する。

研究プロジェクト主催の講演会は2年間で9回開催し、子どもを巡り様々な角度からの情報収集を行った。講演者と演題は次のとおりである。1) 佐伯胖氏「幼児教育における遊びと学び」(青山学院大学教授)、2) 大野芳材氏「フランス美術における子どもの表現」(本学芸術学科教授)、3) 藤森裕治氏「子ども自身の生活背景の登場人物への投影～レオ・レオニ作「スイミー」を手がかりに～」(信州大学教授)、4) 福岡秀興氏「女性の一生を通じた健康」(早稲田大学教授)、5) 簾光夫氏「保育の理念と課題——沖縄をフィールドとして——」(千葉明德短期大学学長)、6) 片岡進氏「日本全国おもしろ幼稚園見聞録」(幼稚園情報センター代表)、7) 前之園幸一郎氏「イタリアにおける子ども観の変遷——ルネッサンス期からピノッキオ、モンテッソーリまで——」(本学名誉教授・前学長)、8) 天岩静子氏「子どもの数の理解過程」(信州大学教授)、9) Benoni B. Edin (ベノニ B. エディン) 氏「Child care in Sweden」(スウェーデン・ウメオ大学教授)である。どの講演会も子どもをキーワードとして子どもへの理解を幅広い分野より深めていく事ができた。我々の研究に賛同し、快く講演を引き受け、多くの示唆を与えてくださった諸氏に感謝する次第である。

先にも述べたが、子どもをキーワードに研究を進めるという事で、プロジェクト構

成員全員での視察、調査による共通理解にも力点を置いた。北海道、沖縄、長野における特徴ある保育展開を全員で視察し、2年間で10施設に及んだ。全員での視察は以下のようなになる。

(1) 北海道幼児教育状況視察（9年8月25日～8月27日）

①札幌市立認定こども園「にじいろ」〔幼保連携型〕（札幌市清田区）、②認定こども園「かすたねっと」〔地方裁量型〕（札幌市東区）、③古平町立 認定こども園「ふるびら幼児センターみらい」〔保育所型〕（古平郡古平町）、④平取町立二風谷保育所（沙流郡平取町）。

(2) 沖縄の幼児教育の現状視察（10年2月23日～25日）

①みどり保育園（首里石嶺）、②夢童幼児園（那覇市繁田川）、③翁長（おなが）幼児園（豊見城）、④みそら保育園（豊見城）、⑤あおぞら保育園（南城）。

(3) 森の幼稚園視察（10年9月8日～9日）、「子どもの森幼稚園」（長野県飯縄）

これらの子どもが生活する傍にその身を置いて直にその状況を感じ取る事は我々の研究テーマには非常に有効であった。そのことは、論文の中にそれぞれの立場から触れてられている事からも理解できる。快く我々の視察を受け入れてくださった方々に深く感謝する次第である。

この他にもそれぞれの研究テーマに向けて適宜、視察、研究会参加などを行った。

以上のような講演会、視察などを通して構成員はそれぞれのテーマに沿って研究を深めていった。プロジェクト構成員の研究テーマは当初考えられていたものを踏まえながらも、プロジェクト研究が進む中で内容が深められ、その結果として若干の修正が加えられたものがあることを申し添えておく。テーマは凡そ次のようになる。即ち、浅見均「保育の現状と課題——調査から見えてきたもの——」（子ども学科）、森下春枝「幼少児期における民俗芸能の活用——子どもの心と身体を育てるアプローチとして——」（共通教育科目）、渡部かなえ「小さな命と健康を守る——北欧と日本の森の幼稚園——」（子ども学科）、吉仲淳「音（楽）の世界から見る幼児の表現性と身体について」（青山学院大学）である。

「子ども」というテーマは大変広範囲の研究領域にまたがる内容を含んでいる。我々大人は子どものまなざしに子どもへのまなざしを重ね、子どもを通して人間や社会を考えていく必要があると考える。今回のプロジェクト構成員による論文はこれからの更なる子ども研究への足がかりとなるものであり、大変意義深いものとなった。総合文化研究所のプロジェクトとしてこの研究の機会が与えられた事に深く感謝する次第である。